

衣食住から、生物多様性を考える

2016年は、2020年に向けて制定された生物多様性条約「愛知ターゲット」の中間年にあたる。2015年9月に国連採択された2030年までの国際目標、SDGs（持続可能な開発目標）でも生物多様性に関連する目標が複数制定され、生物多様性の重要性は、これまで以上に強調される一方、その主流化は思うように進んでいないのが現状だ。

今、改めて生物多様性をどのように捉えていけばよいのか――。

私たちの生活に密着した「衣」「食」「住」それぞれの分野で活躍する3人の識者に聞く。

聞き手：地球環境パートナーシッププラザ 星野智子
編集・採録：つな環編集部

「思い込み」を
どう超えていくかですね。

今の状況をつくりだしたのは
人間でもあるわけですから。

「楽しさ」の要素を加え、
「感性」で伝えていく。

ファッションジャーナリスト/
FUTURADITION WAO
代表理事 生駒 芳子氏
Ikoma Yoshiko

コミュニティデザイナー/
studio-L 代表
山崎 亮氏
Yamazaki Ryo

猟師/ジビエレストランシェフ
上野 朱音氏
Ueno Akane

暮らしで意識する「生物多様性」

星野：「生物多様性」という言葉や考え方を、皆さんはどのように意識し、使っていますか。

生駒：ファッション業界は季節に敏感な業界ですが、私が最初に環境問題を意識するようになったのは2000年頃のことです。異常気象現象が増える中、地球温暖化の原因にもなる大量生産・大量消費の経済がこのまま続くわけがないという実感を持つようになりました。さらに、メディアによって劣悪な労働環境下で児童労働を行いながら安いファッションが製造されていることが暴露されるようになると、一般の人たちの間にも環境や倫理への関心が高まりました。私が編集長をしていたファッション雑誌マリ・クレールで「エシカルファッションが未来の扉をひらく」という記事を掲載し、オーガニックコットンやエシカルという考え方を紹介したのは2007年のことです。ロンドンやパリでは2004年頃からエシカルやオーガニックだけを集めた展示会が開催されています。最近では日本でも、こういった言葉をメディアがキーワードとして取り上げられるようになってきました。その根幹にあるのが、生物多様性という考え方ではないかと感じています。

上野：私は、シェフとして働く中で「材料となる肉を自分の手で獲るところから始めてみたい」と考えたことが、ハンターとなったきっかけでした。もともと家族がアウトドア好きで、狩猟もその延長にある感覚でしたが、実際に山に入ってみると、山が荒れ、水源がダメになったり、深刻な獣害の現状を目の当たりにしました。外来種によって在来生物が絶滅に追いやられ、生態系のバランスが崩れていることも知りました。

山崎：先日まで訪れていたアメリカ出張では「多様性」という言葉についてとても考えさせられました。多様な人たちの存在を受け入れることや、多様性のある社会が大事だとよく言われます。一方で多様性という言葉には、受け入れ難いものにも自分を開いていかな

てはならないという、どこかモヤモヤする気持ちもあります。生物多様性というなら、人間の多様性についても考えるべきではないかと思います。生き物の多様性と人の暮らしはどうやったら成立できるのかを考えていく必要があります。

人間社会の「多様性」に目を向ける

星野：生物の多様性を受け入れる側の人間社会のあり方について、ご指摘をいただいたように思います。この点について、皆さんいかがですか。

生駒：日本人は、自然に対しては八百万の神^{やおよろず}を信仰し、ありとあらゆる生物と共存するスピリットを持っていると言われていました。一方で、ある特定のルールに従わない人は受け入れられないという窮屈さもあるような気がします。

山崎：そのふたつが交わる、バッファゾーン（緩衝帯）と呼ばれるようなところが大事だと思います。例えば自然界でいうと、鹿が多く出てきたところを人間の力で制御して、秩序立てようとするのが正しいのか、という議論も出てきます。

上野：難しいですね。

生駒：人間社会の側に生物多様性がないという、不思議な状況が生まれています。一番大きな課題は、都市に人が集中しすぎていて、地方では過疎高齢化が進み若者がいないこと。農業、林業、漁業、伝統産業の従事者がとても不足していますが、一方で都会では仕事が足りてないという状況です。こういう流れを、なんとか逆さにできないかと思っています。

時代の変遷と価値観の変化

星野：生駒さんは最近、日本の伝統産業の普及のためにNPOを設立されましたね。

生駒：花鳥風月といった言葉に象徴されるように、日本の伝統産業は、自然と共生する暮らしの中で生まれ

用語解説

生物多様性条約
1992年の国連持続可能な開発会議で採択され、翌年発効した国際条約。生物多様性を保全し、持続可能な利用を推進し、遺伝資源の利用から生ずる利益の公

正・衡平な配分を目的とする。

愛知ターゲット
2010年に愛知県名古屋で開催された生物多様性条約第10回締約国会議(COP10)において採択

された国際目標。主に2020年を達成年とした20の目標が定められている。

SDGs(持続可能な開発目標)
2015年9月国連サミットで採択

された国際目標。2030年までに貧困をなくし持続可能な社会を目指す、17目標169項目のターゲットからなる。



てきました。大量消費・大量生産を推奨する経済の中で、忘れ去られ、軽視されてきた伝統産業に再び光を当てることで、私たちの持つ感性を目覚めさせ、新たなネサンスを起こしたいです。

上野：伝統的な暮らしの中には、今に生きる知恵がたくさんあると私も感じています。学生時代に生活していたロシアでは、北部にトナカイを生活の糧にする少数民族が暮らしています。肉やミルクを食材にして、筋肉の繊維を糸にして衣服を作る姿をみて、なんて無駄のない生活だろうと、本当に驚きました。

生駒：昔は日本でも、循環型の暮らしが主流だったと思います。例えば、使わなくなった着物を解体して、座布団や布巾として活用する。そういった着物に象徴されるエコな文化は、明治維新以降、洋服文化が入ることで廃れてしまいました。ヨーロッパは「ビンテージ（古着）」を重宝する考え方はあるけれど、日本は「古着は嫌」という考え方が多かった。でもまた、着物や中古を見直す風潮も生まれています。

さらに最近では、自然由来の化学繊維や再生可能な素材の活用が注目されています。エシカルという観点では、ヨーロッパブランドのアルマーニやヒューゴ・ボスも、今年秋から毛皮を使わないことを宣言しました。市場を牽引するデザイナーがそのような意思表示をする意義はとても大きいですね。

用語解説

エシカルファッション

エシカル (ethical) とは「道徳・倫理的な」を示す英語。人権や環境に配慮し、良識にかなった生産・流通されているファッション商品のこと。

ダイバーシティ (多様性)

ダイバーシティ (diversity: 多様性) は、近年、政府や企業において注目されているキーワード。国籍や性別、年齢や障害の有無など、多様な個性を尊重し、社会の

「人」は、いかなる存在か

上野：ところで、日本では、獣害被害が問題となっている一方で、狩猟免許をとることが難しいです。

山崎：生物多様性を高めよう、里山を保全しようと言っても、そう思う人たちがなかなか森に入っていく状況です。僕の仕事は、そういう人たちの気持ちに火をつけ、生物多様性にアプローチする人の集団を組織するよう焚きつけること。日本でも以前は、狩猟や食料を得るために山に入る人たちがたくさんいましたが、今はそういう暮らしをする人たちがほとんどいません。里山保全が大事と言うけれど、暮らしが変わる中で、本当にそれを維持し続けることができるのか。もしかしたら、一旦自然の山に戻し、そこから数百年という歳月をかけて再び持続可能な状況に戻していくという選択肢も含めて考える必要があると思います。

生駒：地球の本当の健全なあり方を考えたら、人間中心ではないですね。私たちがお邪魔させてもらい、使わせてもらっている。

山崎：自然共生型の暮らしを、これまでのように広い地域で守っていくことが難しいのだとしたら、人が手をつけられなくなった集落を、どのように自然に還していけばよいのか、ということを考えることも必要かもしれません。

上野：人類はもともと、生態系の中でそんなに強い存在でなかったはずですが、火を手にしたことで生き物たちの頂点に立ったと言われています。火がなければ、人類はこれほど中心的な存在にならなかったのでしょうか。

山崎：火を使うことで、脳が発達して、火に代わるものも作るようになった。そして、それを極めて、今度は他の生き物を守り、地球を守らなくてはならないというところに来ている。それだけ脳が肥大化しているなら、自分にとって異質なものも受け入れられるような、多様性を持っていてもいいはずですよ。

生駒：最近、政府の政策で「ダイバーシティ (多様

活力とする「ダイバーシティ推進」が推奨されている。

樹木の当事者適格

アメリカの法哲学者クリストファー・ストーンが1972年に論文

「樹木の当事者適格-自然物の法的適格について」で主張した権利。自然環境に詳しい個人・団体を「後見人」とすることで、自然物も訴訟を起こすことができるとした。

性)」が推進されていますが、そこには生物多様性も入るべきですね。

山崎：パブリック（公共）について考えると、つい「人間」だけが対象となりがちですが、その概念をどこまで広げることができるかが問われている。

星野：環境NGOは、動植物の声を代弁するという役割を果たそうとしてきました。

山崎：70年代にアメリカでは「樹木の当事者適格」をめぐる裁判が起きていました。樹木にも法人格を与え、伐採されようとしている樹木の代理人として、法廷に立とうとした人たちがいた。自然保護団体シエラクラブが訴訟を起こした頃の話ですね。

結びつけるために必要なこと

星野：改めて、生物多様性の主流化のために、何が必要でしょうか。

生駒：最近、仕事で地方を訪れると、都市部にはない多様性にあふれる人間社会の姿に触れることがたくさんあって、地方にこそ未来があるのではないかと感じ始めています。例えば、都会と田舎の交換留学とか、農業・漁業・林業・伝統工芸という4分野を3カ月から1年くらいかけて体験し、授業単位を得られるような仕組みをつくったり。それくらい時間をかけて自然の中で生活すると、言葉や頭で理解するのとは違う感覚がよみがえってくるのが自分の経験上あります。ネット社会が進めば進むほど、実体験を積むことは大事ですね。

上野：海外と日本を行き来すると、日本の社会では子どもの姿を見ることが少ないと感じます。狩猟の世界でも高齢化が深刻な問題で、狩猟はおじいちゃんやるものと思われているところがある。若者も、女性もほとんどいない。

生駒：伝統産業も、それは同じです。

星野：人の多様性が失われている社会の中で、私たちは、どんな道を模索すればいいでしょう。

山崎：環境問題や生物多様性についてのおおよその正しい言説は、努力すれば手に入る。それでもまだ盛り上がらないのだとしたら、「楽しさ」の要素を加え、「感性」で伝えていくことが大事だと思います。地域づくりのワークショップもそう。理性で議論すると、どちらが正しいかという話になる。すると、どちらが議論に勝ったとしても「正しいことはわかったけど、お前とは一緒にできない！」ということになってしまいます。でも「好き」とか「美味しい」といった感覚で話せば、そんな風には分裂しません。

生駒：アメリカで、環境問題を広めていったのは、おしゃれなサーファーたちでした。ファッションも気にする、環境も気にする。そういう人たちの感受性にひっかかると、すごく広がりそうですね。

上野：私も最近「鹿の解体合コン」という企画があるというのを知って、斬新だなと思いました。

山崎：水族館で、あるアーティストが、鮭の切り身口ポットを水槽で泳がせるという展示をやっていて、すごく頓知が効いていると思いました。最近の子どもたちは、魚が切り身の状態で泳いでいると思っているとよく言うけれど、本当だろうか。それは大人の思い込みじゃないか、だとしたら、そこからどんなアクションが必要なのだろうか、深く考えていく。その感性が大事ですね。



自然保護団体シエラクラブ
アメリカ・カリフォルニア州(サンフランシスコ)に本部を置く自然保護団体。

鮭の切り身口ポットを水槽で泳がせる
静岡放送の企画として、相模原ふれあい科学館アクアリウムさがみはらの協力で2015年8月に行われた社会実験。子どもたちが

魚への興味が薄れているのではとの仮説のもと実施され、子どもたちの反応が観察された。



生駒：「思い込み」をどう超えていくかですね。伝統産業の普及でも、一番の課題は地元が無関心であることと言われています。例えば「小学校の給食で伝統の陶器を出してみたら」と提案すると「子どもが割るからダメ」と言われてしまう。でも、子どもは割らないと思うし、割ることだって体験ですよ。そういうルールで閉じた世界が解放されていくといいなと思います。

変化を起こす一歩に

星野：そのような変化を起こすためには、どんなパートナーシップが必要でしょうか。

生駒：ジェネレーションシャッフル（世代が変わること）が大事です。高齢化って社会の負担というイメージが強いですが、高齢者の持つ経験や英知と、デジタル世代の若い人たちが双方向に交わる循環環境ができればいいですね。

山崎：人種や国が違って、年齢が同じ位であれば、それだけで結構つながっていけるんです。むしろ、おじちゃんと女子高生が交わる方が、完全に異文化だし、努力が必要かもしれません。そんなことも含めて、多様性を受け入れていこうという気持ちが必要です。

上野：獣害のような問題は、個人で取り組むには限界

があります。例えば、民間と地方行政と一緒に協力しあうことで鹿肉の販売ルートを開拓したり、猟友会のおじいちゃんたちが監修した鹿料理がコンビニエンスストアで食べられるようになったらいいですね。

山崎：理性で考える人たちがばかりではなく、感性で考える、クリエイターのような人たちとつながることも大事ですね。

生駒：枠にはまらない人たちというのが、実は、社会の起爆剤になっていますよね。日本はクリエイターと経営者の距離が遠く、それはすごく大きな問題だと思っています。戦後71年、経済成長は果たしたけれど、これからはパラダイムシフトをしないといけないと未来はないと、危機的に感じています。そこに新しい発想を持った人が経営者とつながっていく。破天荒なエネルギーをもっているアーティストと、生物多様性に取り組む人たちが連携することで、伝わっていくものもあるのではないかと思います。

生駒芳子 (いこま よしこ)

ファッションジャーナリスト、一般社団法人FUTURADITION WAO (フューチャーディジョン ワオ) 代表理事。VOGUE、ELLEでの副編集長、マリ・クレール日本版編集長を経て独立。ファッション、アート、ライフスタイルをテーマに、社会貢献、エコロジー、社会起業、女性の生き方等の分野で活躍。

上野朱音 (うえの あかね)

猟師、ジビエレストランシェフ。昨今の獣害問題をきっかけにして2013年に第1種狩猟免許、猟銃所持許可を取得しハンターになる。日本では珍しいジビエの普及のため、狩猟専門雑誌のモデルやガンスミスとして猟銃の修理も行うなど多方面で活動。

山崎 亮 (やまざきりょう)

studio-L代表、東北芸術工科大学教授(コミュニティデザイン学科学科長)、慶應義塾大学特別招聘教授。まちづくりのワークショップ、住民参加型の総合計画づくり、建築やランドスケープのデザイン、市民参加型のパークマネジメントなどに関するプロジェクト多数。

用語解説

猟友会

狩猟者のための公益団体。大日本猟友会と各都道府県猟友会がある。それぞれ、野生鳥獣の保護や有害鳥獣の駆除、狩猟の適正化などの事業を手がけている。

データで見る日本の生物多様性

いま、なぜ生物多様性の主流化か？

自然の恵み、多様な生命のおかげで、私たちは風土にあった衣食住や薬といった「生態系サービス」を享受できる。そのバランスを維持しながら利活用していくために2010年に採択された「愛知ターゲット」だが、中間評価「地球規模生物多様性概況第4版（GBO4）」によれば「Good But Not Enough（進捗はあるけれど、

不十分）」で、その解決の糸口として「生物多様性の主流化」を推し進める必要がある。

日本でも、環境省が2014年度より2年かけ、過去50年間の生物多様性及び生態系サービスの推移等を評価し、その検討結果を「生物多様性及び生態系サービスの総合評価（JBO2）」にまとめている。

1 | 生物多様性認識が減少!?

出典：内閣府2014「環境に関する世論調査」

◎「生物多様性」という言葉を知っていますか？

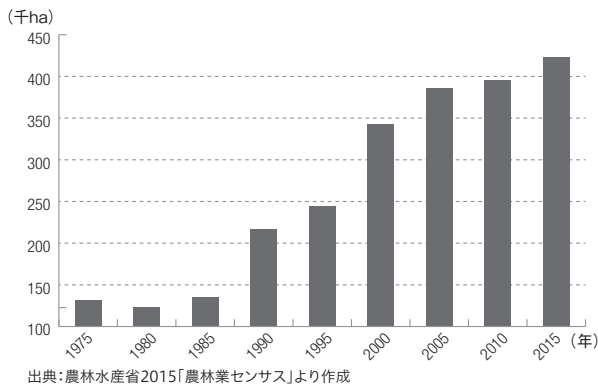
	2009年	→	2012年	→	2014年
意味を知っている	12.8%	→	19.4%	→	16.7%
聞いたことがある	23.6%	→	36.3%	→	29.7%
聞いたこともない	61.5%	→	41.4%	→	52.4%

生物多様性の言葉の認知度は、2010年COP10開催年である2010年以降に認知度が向上したものの、2014年以降低下。

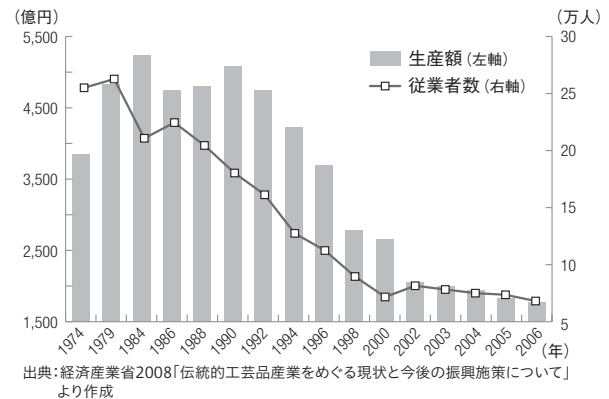
2 | ますます希薄化する自然と産業のつながり

出典：環境省「生物多様性及び生態系サービスの総合評価報告書」(2016年3月)

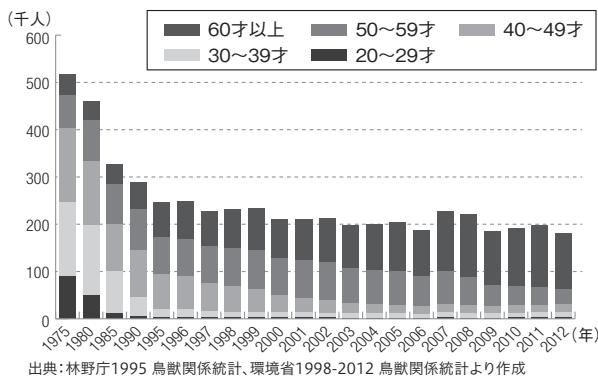
◎耕作放棄面積の推移



◎伝統工芸品生産額の推移



◎狩猟者数の推移



都会的なライフスタイルが普及しても、人々の心から完全に自然とのつながりが消失したわけではない。

3 | 高まる自然体験のニーズ！

◎グリーン・ツーリズム施設への宿泊者数の推移

